

古代の継鹿尾山

犬山市内には、北部の丸山地区に東之宮古墳があつて、卑弥呼など古代大和政権の影響を受けた豪族が居たものと推定されている。その後四百年を経た六七二年に壬申の乱がおこり、当地方の豪族の勢力分布は大幅に入れ替わつた。そのため、飛鳥時代以降の丸山地帯の支配者は、前期古代豪族とは別系の者となつた可能性がある。

寺を開いたといふ六五三年は、道昭がいまだ入唐中なので矛盾する。恐らくは晩年の六八〇〜六九〇年頃に諸国を巡つた際、東山道のルート上にある丸山の地にも足を留め、当寺を開いたのではなからうか。

やく各種の史料に当寺のことが登場してくるようになる。後醍醐天皇の皇子に禅僧となつた龍泉令淬がある。この人は京都の東福寺海蔵院主などをつとめた人で、語録「松山集」がある。その中に、尾州の蓮台寺に遊ぶという一偈があり、

石造文化財では、見るべきものは少ないが、その中で、本堂裏手に大型の宝篋印塔の基礎が残っている。これは市内最大のもので、横幅六二センチ、高さ四五センチを有し、その側面には、

「貞治丁未歳、竹林沙門蔵広化立、令法久住、利益人天」と刻まれている。貞治丁未歳は貞治六年（一二三六）である。今から六百四十年も前に、注文を受けて岐阜県南濃町から運ばれた石で造られた塔で、完全ならば高さ二メートルにもなる。この頃の濃尾地方の一般的な宝篋印塔基礎と比較すると、体積で六倍を有するから、すべて人力の当時にあつてはその大きさは際立っており、当寺の隆盛を示す貴重な遺物といえる。また百キロ以上もある重い塔を当寺に運ぶのには、南濃町から一度桑名へ下り、ついで木曾川を舟で運んできたと考えられ、六百年以上も前にすでに丸山―津島―桑名という運材ルートも確立していたことがわかってくる。

継鹿尾山の開創は白雉五年（六五四）といわれる。この年、道昭和尚が創建したという。道昭は法相宗の僧で、舒明元年（六二九）文武四年（七〇〇）の人。河内国丹比の船連恵釈の子で、法興寺（飛鳥寺）住職となり、六五三年に入唐、三蔵法師玄奘に法相宗などを学び、六六〇年頃帰国した。法興寺へ戻り、また晩年は諸国を巡錫した。六九八年に薬師寺繡仏の開眼供養の薬師をつとめ、大僧都に任ぜられた（日本仏教人名辞典）。

当寺は、山間幽谷の地にあるが、東山道筋の善師野三軒屋から至近の所にあり、今日でも三軒屋に継鹿尾山への道標（江戸中期）が残っている。創建当初の寺名は白鳥山神宮寺と称したという。

その後、養老二年（七一八）に、三蔵法師が当寺へ来遊された際に、継鹿尾山八葉蓮台寺に改称したというが（寛政七年由緒書）、三蔵法師が日本へ来たことは無いので、再考を要する。

特 集
継 鹿 尾 山 寂 光 院
横 山 住 雄

このような経歴から見ると、当

残念ながら平安から鎌倉にかけての当寺の様子はほとんどわからない。南北朝時代に入ると、よう

中世の当寺は、真言宗の一大拠点として、また勉学の殿堂ともなっており、山内に千数百の子院が出ており、修行僧が雲集していたという。その証拠の一端となる中世の

詩も誇張したものでないことは理解できる。

中世の当寺は、真言宗の一大拠点として、また勉学の殿堂ともなっており、山内に千数百の子院が出ており、修行僧が雲集していたという。その証拠の一端となる中世の

花開く中世の継鹿尾山

残念ながら平安から鎌倉にかけての当寺の様子はほとんどわからない。南北朝時代に入ると、よう

中世の当寺は、真言宗の一大拠点として、また勉学の殿堂ともなっており、山内に千数百の子院が出ており、修行僧が雲集していたという。その証拠の一端となる中世の

詩も誇張したものでないことは理解できる。